

---

 学 会 記 事
 

---

## 第21回新潟画像医学研究会

日 時 平成元年7月1日(土)  
午後2時より  
会 場 厚生連中央総合病院  
健診棟4階 講堂

## 一 般 演 題

## 1) 腸間膜由来 castleman lymphoma の1例

関 裕史・加村 毅  
木村 元政・椎名 真 (新潟大学)  
酒井 邦夫 (放射線科)

Castleman lymphoma は縦隔発生例の報告は多いが腸間膜に発生することは稀である。今回我々は、14歳女性に発生した腸間膜由来の Castleman lymphoma の1例を経験し報告した。

Castleman lymphoma は hyaline-vascular type と plasma cell type とに分類され、plasma cell type では貧血・血沈亢進・CRP 上昇・高グロブリン血症などの臨床所見を伴うことがある。CT・エコーで類円形腫瘍として示され、血管造影で血管に富む腫瘍として描出される。本症例もこれにあてはまるものであった。

腸間膜の腫瘍性病変の中で Castleman lymphoma は稀であるが、腫瘍が血管に富む場合は、常に念頭におくべき疾患の1つと思われる。

## 2) 食道癌におけるリンパ節転移の CT による評価

古泉 直也・佐藤 洋子 (新潟大学放射線科)  
清水 克英・小林 晋一 (県立がんセンター)  
新妻 伸二 (新潟病院放射線科)  
梨本 篤 (同 外科)

1987年5月より1988年6月までの間に県立がんセンターで切除及びリンパ節郭清を施行された食道癌患者17例を対象とし、術前胸部及び腹部 CT 所見と手術時におけるリンパ節転移の有無を対比し検討した。大きさについては、長径よりむしろ短径に有意差がみられ、長径 1.2 cm 以上短径 1cm 未満では転移陽性がなかった。部位別では #106, #107 で短径に有意差がみられた。内部構造では転移陽性の場合低濃度のものが多く、rim sign (central lucency) を示すものが傍食道リンパ節に多くみられた。

## 3) 巨大な腹部腫瘍を呈した悪性線維性組織球腫 (MFH) の1例

小島 豊雄・渡辺 裕 (立川総合病院)  
片桐 次郎・大貫 啓三 (内科)  
立川 信三 (同 病理)

症例は77歳女性で、昭和60年1月右臀部腫瘍出現し、MFH と診断された。その後、右肩胛部、左下肺野、左頸部にも再発がみられたが、昭和63年12月下旬頃より次第に腹部が膨隆する様になり、本年2月当科を紹介され入院となった。腹部エコー・CT にて腹腔内に巨大な腫瘍がみられ、内部は多数の隔壁を有した巨大な嚢胞様の所見であった。嚢胞内には多量の黄色透明な液が貯留し、ドレナージチューブを持続留置して治療したが、約1カ月の経過で死亡した。解剖にて、大網に転移した MFH と診断した。

以上より、頻度的には稀ではあるが、腹部腫瘍の診断上、本症例の様な MFH も鑑別すべき疾患の1つと考へ報告した。

## 4) Azygoesophageal Recessus の Mass について

原 敬治・石川 忍 (厚生連中央総合病院)  
安住利恵子 (放射線科)

胸部 x-p 上死角の1つに Azygoesophageal Recessus があり、右下葉 S<sub>6</sub>, S<sub>7</sub>, S<sub>10</sub> の肺と食道右側や縦隔病変描出に困難を感じる経験は多い。今回、Azygoesophageal line 描出率を当院胸部 x-p (ハイオート・補償増感紙不使用)、胸部間接 (中心型グラジュエーション補償蛍光板使用) で比較し、その描出率を比較した。

非描出例につき、その理由を撮影条件、占拠性病変、Azygoesophageal line の傾斜、胸郭構成の変化 (肥満、ビヤダル型胸郭、扁平胸郭、変形漏斗胸、胸弯症)、不明の5理由に大別して分類した。又占拠性病変にはリンパ節転移、Haemangiopericytoma、脂肪蓄積例を呈示し、胸部 x-p 診断上、必須チェック部の1つであることを強調した。

## 5) 卵巣腫瘍の MRI 所見の検討

齊藤 徹・島田 克己 (水原郷病院)  
羽場 啓子 (同産婦人科)  
花岡 仁一 (新潟市民病院)  
(産婦人科)

当院で経験した卵巣腫瘍の MRI 所見を検討し、現時点における MRI 検査の有用性を考察した。